

京都を愛するさまざまな方法

ミュリエル・バルベリ + 平野啓一郎

司会 まず、フランスの作家ミュリエル・バルベリさんについて簡単にご紹介させていただきます。バルベリさんは一九六九年にモロッコでお生まれになり、生まれて数ヶ月で両親と共にフランスに渡られました。その後フランスで教育を受け、高等師範学校を卒業され哲学の教授資格を取得されています。フランスの大学で哲学を十五年間教えられた後、作家活動を開始し、ガリマール社から『至福の味』『優雅なハリネズミ』『La vie des elles』『Un étrange pays』の四作品を出版しています。今回日本語訳された『京都に咲く一輪の薔薇』（永田千奈訳、早川書房）は、京都を舞台にした作品ですが、フランスではその続編『Une heure de ferveur』も最新著としてアクト・シュッド社から出版され、今年のゴンクール賞候補作に選ばれています。バルベリさんは二〇〇八年と二〇〇九年に京都に滞在され、その体験をもとにこれらの小説を書かれたとお聞きしています。今回はフランス大使館主催の「読書の秋二〇二二」の招聘作家として来日されています。

平野啓一郎さんは、ご紹介するまでもなく日本を代表する小説家です。一九七五年に愛知県蒲郡市でお生まれになり、北九州市に移られ、大学時代に京都にいらっしやいました。京都には十年間ほど、まず京都大学法学部の学生として、デビュー作『日蝕』で芥川賞を受賞されたからは小説家として滞在され、日本の小説家の中でも特に京都と深い縁がある方です。また二〇〇四年には一年間文化庁の派遣でパリに滞在されています。作品の外国語への翻訳も盛んで、英語、フランス語、ドイツ語など様々な言語に翻訳されています。映画化された作品も多数あります。

最新作『本心』では近未来を舞台にしながら現代日本社会のさまざまな問題が語られています。

本日は「京都を愛するさまざまな方法」と題しまして、日仏の作家に、京都について、自らの小説について、個人的あるいは文学的に偏愛する街との繋がりについてお話いただければと思っております。

外国人として京都を書くこと

バルベリ 本日はお招きいただきましてありがとうございます。この三年半ほど日本に来られない状態が続いていましたので、やっと日本の地を踏むことができ、大きな喜びを感じています。ご紹介にありましたように私は二〇〇八年と二〇〇九年に京都に滞在するという幸運を得ました。この経験から十年を経て、私は今回翻訳された『京都に咲く一輪の薔薇』を書きました。京都に滞在して以降の十年という年月が、京都での経験を自分の中で小説に転化するためには必要だったのです。ただどうか、この小説を読まれる方には、私は京都の専門家でも何でもなく、ただひとりの人間、外国人が京都について書いたということだけはご承知頂きたいと思えます。

平野 今日はお招きいただきありがとうございます。翻訳された小説を読ませていただき、ミュリエルさんにお目にかかることをとても楽しみにしていました。先ほど紹介にもありましたように、僕自身は、蒲郡で

生まれたのですが、住んでいたのが長かったのは北九州で、その後大学時代から京都に行きまして卒業後もしばらく京都にいました。大体十年間くらい京都に住んでいます。ですから京都にはすごく思い入れがあって、バルベリさんの『京都に咲く一輪の薔薇』も楽しんで読みました。

昔からフランスの作家や映画監督は、日本の映画、絵画など色々なのに関心を持つことがあるのですが、日本人自体もかなり外国人、特にフランス人の日本の映画や美術の見方の影響を受けて、日本文化を再発見しているということもあると思います。例えば、小津、溝口の映画は、今の若い映画好きの人たちも観るのですが、子どもの時からずっと日本で観てきた映画体験の延長上に、ダイレクトに小津、溝口の世界に接続出来る日本人は、あまりいなかったと思います。やはり日本のシネフィルムと言われている人たちも、ゴッタルが褒めているとか世界的に評価されているとかいう文脈を通じて初めて小津を観たという人たちがたくさんいて、僕もそうでした。大島渚もヌーヴェル・ヴァーグの監督たちの批評を経由して再発見したということがありました。そういう意味ではミュリエルさんの京都の本も、僕たちが京都を再発見するような見方や思考がたくさん詰まっています。面白かったです。

他者の声を書く

バルベリ 小説家として、今のご指摘は大変重要だと思います。私は、小説家というものは、他者の声を描ききることが重要だと思っています。私もともと私は非常に読書が好きで、外国語で書かれた小説も沢山読めます。それは外国の思想、他者の思想に触れることが大切だと思っているからです。平野さんが同意されるかどうか分かりませんが、私は日本の文化を好きになった者として、日本のさまざまな事柄を書くことで日本という環境の中に浸ることが出来ました。実際、私は哲学の教育を受け、哲学教師として十五年間勤めてきました。哲学では概念、コンセプトというものを主として用いますが、小説では、むしろ映像、イメー

ジというものを使って、他者の皮下に入り込むのです。

実は私は今回日本に来て、日本を舞台にした小説について語るということに少し不安を抱いていたのです。私は日本の方の反応を知りたいと思うと同時に、それに対する恐怖も少なからず感じています。

平野 現代でも日本に興味を持つフランス人作家がフランスやベルギーに何人かおられて、僕はエリック・ファーユさんですとかアメリー・ノートンさんですとか、日本をテーマにした小説を書かれた人たち何人かと対談したことがあります。彼らも自分たちの見方が日本人から見てもうなのかということに非常に気にされています。ただ読んでみるとやはり、書かれているものが非常に面白くて、日本人が感じる通りに描かれている部分もあるし、意外な見方をされているところもあるので、その両方が面白みなのではないかと思っています。

『優雅なハリネズミ』の時代背景

平野 ここで少し小説の話をしたのですが、今回の作品だけではなく、『優雅なハリネズミ』というフランスで大ベストセラーになった作品も読ませていただきました。こちらは二〇〇六年に刊行されたようですが、僕の小説の書き方とはスタイルがずいぶん違うのですが、この中に描かれている時代の雰囲気非常に自分に自分と共通するものを感じました。

九十年代からゼロ年代の初頭にかけて、日本にも、これからどうやって生きていったら良いのか、だとか、何のために生きているのか、といった一種のニヒリスティックな雰囲気があって、僕自身そういう中で自分とは何かだとか、生きていくことの意味だとかを非常に考えながら小説家として出発した作家でした。

その時代には、世界に共通の出来事がたくさんありましたが、日本の場合まず八十年代の終わりから九十年代の初めにかけて冷戦が終わったというのと、日本のバブル経済が崩壊して経済的な右肩上がりの成長が

終わったこと、また昭和という時代が終わったことがあり、九十年代の本当に世界がどうなっていくのか分からなくなっていく中で、日本という国自体が自分探しというか、迷走し始めた時代で、僕自身そういう中で本当にどうやって生きていくのか真剣に悩んだことがあります。

もう一つは九十年代まで、日本でもフランスの現代思想を導入したポストモダンブームがありました。今ではフーコーとかドゥルーズが考えていたことが現代社会を考えていく上でどのように重要かということについて具体的な思索が深まっていると思うのですが、九十年代まではファッシオンのなものとして取り入れられて、知的な議論が交わされていました。しかし一体自分が生きていく上でこのポストモダン思想が何の役に立つのかという疑問も非常に深くあって、『優雅なハリネズミ』の中でも書かれている、自分の生きている時代に生きている意味が全く感じられない少女の不安と、それまでに蓄積されてきた哲学だとか知というものに対する疑いみたいな感覚が、当時日本で僕が感じていた雰囲気と非常に似ているということを感じました。

最後に付け加えると、そういう僕がミュリエルさんとは逆に、フランス文化に非常に憧れを持って、日本という社会の中で感じている閉塞感を抱えながら外国文学、特にフランス文学を読むことで救われた部分もあり、フランスの文化に非常に憧れを持って、実際二〇〇四年から一年間パリに住むということがありました。ですから逆の立場ですけど、ミュリエルさんがそういう雰囲気の中で京都に来ようとされたということも分かる気がしました。

外国人を創造すること

バルベリ 平野さんはその八十年代九十年代の不安に満ちた時代から、将来フランスを舞台にした小説を書くことになる

だろうと考えていらっしまったのでしょうか？

平野 僕は最初に『葬送』という小説でドラクロワという画家とシヨパンという音楽家について書いたのですが、それはやっぱり日本はヨーロッパの近代化を受け入れながら発展していった国で、そういう国がポストモダニズムという思想まで受け入れた後、ある種の行き詰まりの状態になった時に、そもそもヨーロッパの近代とは何だったのかということ



もう一度考えなおしたいというので、二月革命前後のフランスの社会を描こうと考えて、その時代を生きた二人の芸術家を主人公にすることにしました。

バルベリ 実際それは外国人の登場人物だったわけで、作家というものは、外国人の声を代弁することまで出来るということですね。

平野 そうですね。だからミュリエルさんの作品も、先ほどもいみじくもおっしゃいましたけど、やっぱり他者の声を書くということが小説家にとっては非常に重要で、アパルトマンの管理人というのはミュリエルさんのキャリアとはずいぶん違うけれども、そういう他者の声を書くということが、重要なテーマになっていることは非常に良く分かります。今度の『京都に咲く一輪の薔薇』にしても、まず死者という他者が存在し、そして京都に住んでいる人という他者が存在して、そういう人たちとどういふふうに分かり合っていくかということが非常に丹念に描かれていて、その部分に共感しました。

バルベリ 『優雅なハリネズミ』には、実際日本人が出てきますが、それを執筆した時点では、私はまだ日本に来たこともなく、日本に来ることを夢見ている状態にすぎなかったのです。一応その人物は脇役的な人物でした。その後で日本に来る機会があり、京都のヴィラ九条山に滞在することが出来ましたが、それを小説の形にするのに十年間を要しました。この小説では、主要な登場人物はフランス人ですが、それ以外の人物として日本人も出てきます。私は、自分が出会った人たち、日本の方々の思い出の断片を甦らせ、それが形となって小説を作り上げるというやり方をとっています。実際のところ、主人公はフランス人なので、フランス人の目から京都を眺める設定です。

その後、私は大胆にもさらに先に進んでしまい、このフランス人と日本人の親をもつ主人公の父親である日本人の話を更新著で書いてしまっ

たのです。それはなぜかと申しますと、『京都に咲く一輪の薔薇』の主人公ローズは、四十歳くらいの人物なのですが、父親が日本人で、その父親が死んだという知らせを受け取って京都にやってくるという設定でした。そしてこの作品を書き終えた時、なかなかその人物たちと私は縁を切ることが出来なかった、離れられなかった。それで彼女の日本人の父親について書きたいと思ったのです。そして父親の物語を書くことを決意し、歴史を遡って父親の物語を書きました。この作品はフランスで出版されたばかりなので、まだ日本語では読めないのですが、翻訳されたら平野さんに是非感想をお聞きしたいです。

平野 そうすると、その作品というのはローズのお母さんとお父さんであるハルとの恋愛がひとつの中心になってくるんですね。

バルベリ そうです。

京都を舞台に小説を書くことの難しさ

平野 楽しみですね。この小説で、ミュリエルさんがされていることは、実は日本の作家にとっても非常に難しいことなんです。と言いますのも、京都の外側から来たよそ者が京都について書くということは、日本人の作家にとっても難しいんです。川端康成だとか三島由紀夫だとかいろんな作家が京都を舞台にした小説を書いています。が、やっぱり日本の他の土地を舞台にするというのとまたちよつと違った独特の街だということがあるので、僕も京都に十年くらい住んでいたわりに京都を舞台にした長編小説を書いてくださいと言われると、身構えるというのか、本当に大丈夫かな、京都の人に怒られないかな、とちよつと考えます。

バルベリ 私がいかに勇敢かということがお分かりいただけただけなのではないでしょうか(笑)。京都への愛ゆえに書いてしまったということでお許

しただければと思います。確かに今、平野さんから、京都は日本人にとって特別な場所であるとお聞きしても驚かないほどに、京都は深みのある街だと思えます。私自身は人生において多く旅をし、色々な場所を訪れているのですが、京都で出会ったこと、経験してきたことほど奇妙な出来事を説明しようとか、理解することが目標ではなく、むしろそれを淡々と描き出すということが目標になりました。平野さんも京都について色々お書きになっているとは承知していますが、私自身も京都という街の非常に奇妙な性質というものについて、自分の経験をもちって知っています。しかしそれをどのように表現するのは、非常に難しいです。この言葉を通訳の方がどのように訳されるのか分からないのですが、京都においては、「今・ここ」という感覚の中に「永遠」を感じる、非常に不思議な街です。この感覚について、平野さんがどうお考えになるか伺いたいです。

平野 『優雅なハリネズミ』の中でもカイロスの時間と、クロソスの時間、ずっと続いていく時間の対比が非常に重要なテーマになっていて、カイロスの時間の永遠性が重視されているので、その経験が『京都に咲く一輪の薔薇』の中でも引き継がれているということを非常に興味深く読みました。

京都とパリの比較

平野 実際、京都はなかなか全体としてこういう街だと言にくい所があります。まず、パリもそうだと思うのですが、エリアによってかなり性格が違いますね。京都大学の周辺の百万遍の辺りは、学生街でカルチュエ・ラタンみたいな雰囲気ですし、祇園に行けば観光地の写真に出ている様な舞妓さんがいてという場所だし、西陣の方に行けば伝統的な生活をしている人たちもいる、ということでは一概に京都と言っても場

所によって本当に違うし、京大に四年間か五年間ぐらい在学している人たちもほとんど百万遍周辺でうろろしているだけなので、四年住んでいても先斗町ぐらいまでは行くかもしれないけれど、祇園は一回も行ったことがないまま卒業して別の地区に行ってしまう人がたくさんいる。それから建物に関しても何百年も前からあるような建物もある一方で、住宅街は普通の住宅街ですし、大学の周辺というのは学生マンションがたくさん建っているの、せいぜい十年とか二十年くらいで建てた壊れというのが繰り返されています。街の中心に行けば大体昭和三十年代くらい、一九五五年くらいの時期に作られた町家が今でも残っていて、それを保存するかどうかという議論もされている。ですから何百年というスケールの中で残り続ける建物と、他の街と変わらないように作っては壊されてというのが行われているエリアがあって、そのコントラストが非常に興味深く、その中で現代的な時間を生きる時間と非常に長い時間に触れる時間というのが生活の中にあるというふうに感じています。

バルベリ 私が二年間京都にいた時は、幸いにして仕事をやる義務がなかったため、街を隅から隅まで歩きまわって京都のあらゆる側面を見ることができました。パリ、あるいはすべての都市についても同じことが言えるかもしれませんが、パリであればラ・デファンスとチュイルリー辺りでは全く違う顔が見られます。そして確かにこのような多様性が京都に認められるということはあるにしても、私は街の魂というものが同時に存在しているのではないかと、歩き回りながら考えていました。私にとっては、京都の魂を表すもの、それは川ではないか、北から南へと流れる鴨川ではないかと思いました。その川の流れ、その永遠性、その流れ去っていくということの中にこの街のアイデンティティがあるのではないか。その中に過去と現在が混じり合っているのではないかと思っています。

平野 鴨川に関しては、僕も全く同じ印象を持っていました、非常に特徴的な川で、雨が降ると鴨川も結構激しく流れるのですけれども、普段は非常に浅くて、そのお陰で水に近い所まで人が近づいていて、しかも程よい川の流れの音が聴こえていて、そばに座ってぼうっと見ているだけで何時間も経ってしまうとか、その近辺を散歩するだけで何故か心が穏やかになる様な独特の時間の流れ、京都の独特の時間の流れを、ミュリエルさんがおっしゃる通り、象徴している気がします。

もう一つ、東京に比べると、京都は住宅の建物の高さ規制をかなり厳しくやったので、その分、空が非常に大きく見えるんですね。東京に行くと両サイドにビルが立っていて道も曲がりくねっている、正面にも必ずビルが立っていて、空というと、見上げた本当に小さな所にしか見えない。京都来ると、建物が低いので三六〇度本当に大きな空が広がっていて、周囲を山に囲まれているという開放感があります。それはまた道がまっすぐだということもあって、向こうの方まで何も建物がなくて、曲がりくねっていると、必ず目の前が何か建物で塞がれるはずなのですが、道がまっすぐで建物が低いというお陰で、京都来ると、街は小さいのですけれども空が大きいおかげで非常に開放感がある気がします。

ところで一つ質問があるのですが、京都とパリは似ているのではないかとこの話は昔からあって、似た様な古い街という言い方をされることもあれば、やっぱりあまり似ていないのではないかとこの話もあるのですが、ミュリエルさんの印象として、どうでしょう。似ている所と似ていない所はありますか？

バルベリ 私は実はパリはあまり好きではないのです(笑)。実際この比較というもので、私が理解出来るのは、洗練という部分で共通する部分があり、その洗練の源としては、王宮が置かれていたということがあると思います。また同時に、パリと京都というのは、美食の街でもあるということでも共通している部分があると思います。

ちなみになぜ私がパリをあまり好きではないかと言いますと、建築が非常に権力的であるということがあります。フランスの建築は石によって作られた垂直的な建築で、非常に権力的です。それに對し、京都に滞在して感じるのは建築物から安らぎを得ることが出来るほどに街が人間的であるということです。そこで用いられている建築資材というのは有機的なもので、フランスの建築資材とは全く似ても似つかぬものです。京都では、美が全く権力と結びついていないと思います。それに對し、美が権力を象徴し、やや高圧的であるのがパリの特徴ではないかと思えます。それとは正反対の嗜好、美学というものこそ、京都に来て私が最も魅了されたものです。

平野 実は、僕はパリという街が非常に好きなので(笑)、良い所もたくさんあると思います。やっぱりフランスに行つて、初めてルーヴル美術館の辺りを歩いた時には本当に圧倒されました。明治とか江戸時代の終わりに日本から留学生や遣欧使節としてヨーロッパを見て回った人たちがいかに敗北感を感じたかということを含めて今でもひしひしと感じます。ですから、今でもパリに行くとき非常に胸が躍るところがあるので、ずっとそこに住んでいる人とは違う感覚だと思のですが、今でも観光客のように色々な所に行つて見て回るようなところがあります。

ただおっしゃる通り、どういふものを素材として建物が建っているのかということとは大きな違いで、石造りの建物が中心なのか木なのかということが本当に街の性格を大きく変えていると思います。『伊勢物語』など日本の古典を読んでいると、男が女性の所に通つていて、しばらく通うのを止めていて久しぶりに行つたら家が荒れ放題になつていて昔の人の面影も何もなくなつて、ただのあばら小屋になつていたというような話が結構ありますけれども、そういうふうになつておくと自然に飲み込まれていくし、人が没落していくのと家が段々滅びていくのも一絡なんだという世界観というのは、木で作っている街ならではの気がします。

先ほどミュリエルさんがおっしゃったように、文化的にはパリと京都は、ついつい比べたくなる、ある種の洗練された料理や建物ですとか色々あるのですが、京都の場合は、近代化以前に政治的な中心である首都という機能を早々に逃れて、政治的な機能は全部東京に移ったので、それが京都にとってはすごく良かったのではないかと思います。

京都の庭の面白さ

バルベリ 平野さんがおっしゃったように、京都に非常に特徴的なのは、大きな都市であるにもかかわらず、自然が良く保存されていることです。街に行くと、その周りに山を見ることが出来ます。そして言うまでもないことです、数多くのお寺、その中の庭の存在がフランス人にとっては非常に衝撃的です。フランス人にとっては、寺院の庭が、芸術作品にやううるということは非常に考えにくいことです。京都に常に存在している自然、そしてその自然が

芸術という域にまで高められているということに私は非常に感動します。実際、昔の庭師たちが庭を造るに際して、どのように芸術作品として構想したのかに思いを馳せる時、私は非常に感動を覚えます。

平野 京都の庭は、特に禅宗の影響を受けた庭は、やはり日本人が行っても不思議なんですね。謎があつて、非常に考えさせられるとい

うところが、京都の庭の面白さで、お寺でも何でも、龍安寺の石庭もそうですね。これは、意外と外国の庭を見た時に、例えばフランスのヴェルサイユ宮殿の庭園とか、あるいははもつと小さなロダン美術館の庭だとか非常に美しい庭が沢山ありますし、チュイルリー公園とか沢山あるのですけれども、不思議な感じだとか謎というのはあまり感じないですね。美しさに圧倒されて、きれいだなあとか心から思いますけれども、これは何なんだろうということを考えて、考えながら過ごす時間自体が一種の快樂だということはあまりないです。京都の庭はやはり不思議で、これは一体何を表現しているのかということも思わず考えってしまうんですが、その静かに考えている時間が非常に日常から自分を引き離してくれて心を落ち着かせてくれる、そういう効果を昔の庭師たちが発明したということに面白さがあるという気がします。

バルベリ 私が思うに、おそらくフランスの庭は自然の否定から成り立っているのではないのでしょうか。つまり自然はこのようなものではないが、それとは違うものを造ろうとして成り立っているものではないかと思えます。京都の庭を眺めていると、自然が持っている秘密を見ているのと同じような感覚を持ちます。もちろんその庭というのは完全に人工的に造られたものですが、自然が秘めている謎を見ているのと同じ感情を抱かせるのです。実際、私が一つ前の小説、『京都に咲いた一輪の薔薇』で書いたことでもあるのですが、一つの謎があつて、その謎と共に在ることが非常に快適であるような、そういう不思議な世界をつくり出しているように思います。西洋の庭は美的な感覚を与えるかもしれませんが、京都の庭は、小説の中のように、transformation 自分が変わるという経験を与えてくれる珍しい場所です。

平野 僕はフランスの庭を見るときにくだんと結構感動するんですが、やっぱり宗教的な背景、思想的な違いが大きいと思うんですね。京都の庭をじっくりと見ていると、やっぱり永遠のものと移ろい行くものとを直視



することになって、自分というのはこの自然と同じように自然と一体化して諸行無常の世界の中で、いずれ滅びていくのだろうか、それこそが仏教的な真理として受け止めるということに本当に幸福感を感じられるのかどうかというようなことを自問させられるんですね。ですから、自分という自我があつて自然があるというのではなくて、ここにある自然と自分が本当に一体化しているということを感じることなのかどうかということについても考えさせられる、それが京都に行つて京都のお寺を見ている時のちよつと特別な感覚なんです。

『京都に咲く一輪の薔薇』で表現したかったこと

平野 ミユリエルさんの小説を読むと、『優雅なハリネズミ』でも、カントと現象学の対比の話があつて、この世界に自分が存在しているということ、この世界そのものが何であるかということと主人公ルネが思索しますけど、その思索の延長が『京都に咲く一輪の薔薇』にも反映されている気がしました。亡くなって既に存在しないお父さんと現に存在している孤独を抱えている自分と、それから京都のお寺に行つて直視するその存在と無との抽象的な思考みたいなものが、続けて読むと連続していて、ミユリエルさんの中にある、ここに在ること、自分が在ること、世界が在ることに対する根源的な問いが、京都を舞台にする作品にも反映されている印象を受けます。

バルベリ 非常に素晴らしい読み方をしていただいてありがとうございます。フランスでは、あなたの小説のテーマは何か、特に社会的なテーマは何かということをよく聞かれます。そのような質問を受ける度に私は非常に困惑します。私は小説の中で何かのテーマを主張しているわけではないからです。私が興味を持っているのは人間の生、暮らし、そういうものです。

私が非常に好きな作家であり文学理論家でもあるミラン・クンデラが

あるエッセイの中で素晴らしいことを言っています。それは、小説というものは、現実の存在を描き出すものではなくて、可能な存在というものを描き出すものなのだ、というものです。実際私がやっていることは、架空の登場人物を作り出して、人生に対峙させる、直面させるということなのです。そして、もちろんその登場人物たちは、さまざまな政治的、社会的な局面に直面するわけです。私はその政治的、社会的テーマが何かということにはあまり興味はなく、その人物たちが現実に直面すること、自体に興味を持っています。平野さんの場合もそうであると言えるでしょうか？

小説のテーマとは

平野 そうですね、僕の小説にも結果としては社会的な問題とか色々なテーマが含まれているんですが、どうして哲学だとか社会学だとかそういうアプローチで書かないのかと言いますと、文学の場合は、例外的な個人から必ず話が始まるし、例外的な個人から話を始めることが出来るということが文学の良い所だと思っんですね。つまり今の時代はこういう時代ですという時代の典型となる人物を必ずしも書く必要はなくて、今の時代からしても例外的な人物に着目して、話をスタートすることが出来る。しかし、それはたとえ変な人であつたとしても、とにかく具体的な一人の人間なので、名前を持っていて、色々な社会的な属性を持っている具体的な話なんです。その具体的な話を語っていくことで、抽象的に論じている時には納得できているような理論だとかアイデンティティの問題が、必ず具体的な話をしていると、色々な所で現実的にはそうではないということが沢山出てくる。現実的にはそうではないということを考えているところで、生きた人間の感情だとか理想だとかを描くことができて、それが文学の非常に良い点なのではないかと思っんですね。ですから、僕も、男とは何かとか、あるいは日本人とは何かとか、京都人とはどういう人間かというようなことを描こうとしても難しいと思っ

んです。ただ、京都に住んでいる具体的な誰かを描くという事は出来るわけで、それがやはり僕自身も小説を書くということですし、ミュリエルさんが京都について論じる本ではなくて、京都に住んでいる具体的な人の話を書いているということなのではないかと思えます。

バルベリ 私にそれが出来ていれば良いのですが（笑）。

平野 昔から日本では、男性作家が女性を上手く書けていると小説家として一人前だと言われた時代がありました。でも実際には女性と違って色々な女性がいるので、女性が上手く書けているということは簡単には言えない訳ですけども、他者としての女性が上手く書けているかどうかということが随分言われている訳ですね。だけど繰り返しになりますが、女性といっても色々な人がいるので、僕の小説を読んでも、平野さんは女の気持ちがかかっていないという読者もいます。具体的な人を書くとき、必ずそういうことが出てくるので、ミュリエルさんの小説にしても、やはりあくまで具体的な個人を描いているという視点で読むのが大事かなと思います。

質疑応答

司会 お二人の文学論は非常に興味深く、もつと聞いていたのですが、終了時間が近づいてきて、フロアにお集まりの方が質問したような表情をこちらに向けておりますので、ここで少し質問をお受けしたいと思います。よろしいでしょうか。

質問者1 お二人が京都とパリで一番好きな季節についてお伺いできますでしょうか？

バルベリ まず平野さんにパリについて話して頂いてから、私が京都についてお話ししましょうか。

平野 そうですね、しばらくパリに行っていないので、真夏のおそろしいほどの暑さになっている最近のパリは知らないんですけれども、少し前のパリに行くとき夏はすごく日が長くて夜の九時とか十時まで明るくて、外にみんないるという雰囲気は日本で経験したことが無い感覚で、それが僕は楽しいなと思っていました。逆に、冬にパリに行くと、日が昇るのもすごく遅いですし、日が落ちるのもすごく早くて、せっかく来たのに損をした様な気がするんですね。行くのだったら日の長い時期に行くのが良いと思います。

バルベリ 京都についてもお答えいただいてよろしいですか。

平野 京都も住んでいると冬は寒いですし夏は暑いので、春か秋でしょうか。春の桜もきれいだし、秋の紅葉もきれいな時期に行くのが一番だと思うんですけども、京都はその時期最近オーバーツーリズムの問題が非常に深刻になっていて、それに疲れてしまうので、コロナ禍の間は京都も観光客が極端に少なくなっていて、非常に静かに桜や紅葉を見ることが出来て良かったんですけども。ただあまり観光客が来ないのも京都の人は困ると思うので、ちょうど良いくらいに賑わっている春とか秋が良いんじゃないかと思えます。

バルベリ では私は今一番いい時期に来ているということですね（笑）。私は京都であれば、間違いなく秋です。なぜなら、紅葉が大好きだからです。特に個人的には葉が散りきっていない時期の京都を味わいたいの、秋の早い時期に来たいと思っています。紅い葉とまだ紅くなりきっていない葉が同時に散って行く様が、私にとっては比べるものない感動的な光景となっています。世界中でこれほど心の中に苦悩と喜びを同

時に引き起こすスペクタクルはないと思っています。

質問者2 先ほど鴨川が京都を象徴しているとおっしゃいましたが、京都にある数多くのお寺や神社ではなく、なぜ鴨川がそのように特別な存在に思われるのでしょうか。

バルベリ 私もどうして鴨川がそのような不思議な魅力を持っているのか分からないのですが、川があることによって街が二つに分かれているということがまずあり、それを越えるとか何か境界を越えたというような感じがするのです。それは川ではあるのですが非常に穏やかで全く危険な感じがしません。徒歩で渡っていくことさえ出来ます。またそのような理由から、鴨川はあたかも人のようでもあり、街の命を宿した存在だと思ふようになりました。でもそれだけでは、秘密を解明したことにはならないかもしれませんね。

平野 ひとつ非常に面白いのは、南から北に向ってエリアによって、鴨川も表情が違ふんですね。三条とか四条の辺りは観光客がいたり、デートしているカップルが等間隔に座っていたりとかしますけれど、今出川とかの辺りに行きますと大学生がデルタの所でバーベキューとかしていますし、もうちょっと北の植物園の辺まで行くと、地元の人が子どもを連れてピクニックしたりとか、走っている人が沢山いて、地元の人のおいこの場という雰囲気が強くなります。それぞれ表情の変化がとも面白くて、僕の住んでいた時には、北大路通りだとか北山の方に行った植物園の辺りだとかでのんびり過ごすことが多くて、そこは本当にゆったりした時間が流れていて好きでした。

質問者3 (フランス語で)「著書の中で「鉱物性(ミネラリテ)」という言葉が出てきて、この概念が分かりにくいので説明いただきたいのですが。

バルベリ フランス語で質問して下さったことに感謝いたします。この *mineralité*、鉱物性という言葉は、確かに訳しにくいらしく、色々な国の翻訳者から質問が寄せられていて、今日は日本語版の翻訳者も来ておられるのですけれども、過去に質問を受けました。

まず石庭を例にとりまして、石の庭は非常に珍しいもので、世界でも他の場所では見たことがありません。西洋での私の経験では、石というものは美しいけれども、死んだものであるという認識でした。ところが、京都の石庭や他のさまざまな石の感覚を味わった時、石が生きているように感じられたのです。そしてそれが、自分の中にあつた感覚、固く閉ざされながらも生命を宿した「鉱物」という感覚と響きあつたのです。そしてその奇妙な経験を小説の中で表現したいと思つたのです。それが質問に対するお答えになつているかどうか分かりませんが。



質問者 4 冒頭で話された作家と他者の関係についても少し詳しくお話しいただけますか。

平野 では僕の方から先にお答えしますと、小説を書くというのは、ナルシステイックに自分の自我を肯定し続けるということではなくて、他者を通じて自分の認識が開かれていくという経験がまず一つ重要で、ただ結局自分からは完全に遠い他者で、何の接点もない経験でもなくて、その他者の中に自分が共感する部分を新たに発見するということも同時に重要で、その遠さと近さの両方を経験するということが小説の面白さなのではないかなと思います。そういう意味では、最初から自分に近い人物を設定してしまうと、自分にとっても読者にとっても発見がないし、一見自分とは無関係な、遠い他者のように見えながら、そこに共通点が段々見えて来て、一人の具体的な人間の話から、もっと大きな人間一般に関わる問題ではないか、と読者が思えるという経験が、小説の醍醐味なのではないかなと思います。

バルベリ 私も平野さんに全く同感です。他者になる、他者を通じて自分になる、他者の声を通じて自分自身を発見していく、自分に近づいていくということが、まさに小説を書くことの醍醐味です。たとえその小説がオートフィクション（私小説）的なもの、著者本人に近いものであったにしても、迂回を通じて自分自身に近づいていくという形をとるのであると思います。

司会 残念ながらここで時間となりました。以上で本日の対談を終えたいと思います。お二人に改めて盛大な拍手をお願いします。（会場拍手）

バルベリ 本日はありがとうございました。

平野 ありがとうございます。

二〇二二年十一月十四日

於 名古屋外国語大学、名駅キャンパス、ヴラリ

司会・翻訳・編集 伊藤達也